

イソップとアリストファネス喜劇

—— 寓話『驚と甲虫¹⁾』をめぐって ——

岩 男 久仁子*

はじめに

一般に、口伝えで受け継がれた物語を「伝承文学」あるいは「口承文学」²⁾という。様々な「物語」の持つ意味は「伝統」にもとづいて、時代とともに変化し、新たに生まれかわる。その代表的なものに、古代ギリシア世界で生まれ、世界中に広まって、現在にいたっている「イソップ寓話」がある。わが国でも、数多くのイソップ寓話集が出版され、大衆に馴染みの物となっている。それらの寓話の中には、「娯楽的読み物」や修身（道徳）または国語の教科書³⁾に採用されたものもある。

ここでは、数ある「イソップ寓話」の中から、アリストファネスの喜劇作品にあらわれる「驚と甲虫」という寓話を取り上げ、そのテキスト解釈を試みる。

I 寓話の歴史 その1

— イソップ寓話伝承系統図⁴⁾ をたどって

今日では、「寓話＝イソップ」という等式があたりまえのように通用している。この等式はいつ、どのようにして成り立ったのか⁵⁾。ギリシア・ローマ人たちの間で、「寓話」はどのように認識されてきたのか、その歴史を振

* 本学文学研究科博士後期課程

キーワード：イソップ伝、アリストファネス喜劇、G本、寓話「驚と甲虫」

り返ってみたい（資料－1「イソップ寓話伝承系統図」を参照）。まず①は、ホメロスの時代（紀元前8世紀）から古典ギリシアの段階である。この時代には、未だ「イソップ寓話集」なるものは存在しない。口承で伝えられてきた「イソップ寓話」が、劇ないし詩などの中で引用されるにすぎない。例えば、ヘシオドスの『仕事と日』の中の「鷹と夜鶯」202行～205行⁶⁾や、プラトン『アルキビアデス』中の「年老いたライオンと狐」123a⁷⁾がそれである。この段階では、「イソップ寓話」は修辞上の工夫や、有効な説得のための的確な表現や手段として使われていた。またこの時期には原則として「寓話」の作者への言及はない。しかし、喜劇作家アリストファネスにあっては、「寓話」はすなわち「イソップ」である。彼の作品の『蜂』や『鳥』『平和』『女の平和』では、登場人物がイソップについて言及する。このことについては、後の章で詳しく論じる。

口承寓話、あるいは、様々の書物の中で引用ないしは言及されるにとまどっていた諸々の寓話は、やがて一つに集成され、「寓話集」が作成されるにいたる。「イソップ寓話集」の誕生である。その最初のものはファレロンのデメトリオスによる『アエソピカ』（Aesopica）⁸⁾（系統図②を参照）の編纂である。この『アエソピカ』の本文は現存していないため、その内容はよく分かっていない。編者であるデメトリオスは、アリストテレスの孫弟子にあたる人物である。デメトリオスが寓話を集成した意図は、詩や劇作品をより効果的にしたり、弁論家が自らの演説内容をいっそう機知に富んだものとするために寓話を利用しうるものとするものと思われる。この「寓話集」は、「レファランスブック」という性格をもっていた。引用するのに都合のいいように、寓話の内容を要約する promythium（前書き）がついており、それが目次、索引としての役割を果たした。そしてこれは、「寓話辞典」にふさわしく散文で書かれてあった⁹⁾。

次に紀元後1世紀のファエドルス¹⁰⁾、バブリウスの時代¹¹⁾（系統図③、④参照）になると、韻文で構成された「イソップ寓話集」があらわれる。すなわち、この二人が編纂したそれぞれの「イソップ寓話集」は、従来とはちが

って韻文で書かれた。こうして、「寓話」そのものが、文学としての地位を確立することになる。「編纂した」と書いたが、彼らの寓話集には「寓話」の形式を借りて、詩＝韻文体で叙述した自らの作品も含まれていると推測されている¹²⁾。彼らの寓話集は新しい「文学」のジャンルを樹立したものであったが、その背景には、「寓話」の読者層が変り、従来とは異なる性格が寓話集に与えられるようになったという事実がある。その結果、目次としての役割を果たした promythium が、話のまとめとしての教訓を表すものとなり、さらには epimythium（後書き）に変わっていく¹³⁾。読者を楽しませる事が主目的となり、「寓話」が本来持っていた道徳的勧奨や処世訓は二の次となり、次第に epimythium もなくなっていく。

A段階 promythium（前書き）付寓話

↓

B段階 epimythium（後書き）付寓話

↓

C段階 epimythiumなし寓話

promythium と、epimythium の例をファエドルス、バブリウスそれぞれの集成から取り出してみる。A段階、B段階の例である。ファエドルス版でも promythium が減っていき、逆に本文に epimythium を付したものが増えていっている。バブリウス版ではこれがいっそう顕著となり、promythium はなくなり、「(韻文の) 本文+epimythium」という構成となっている。promythium がついているファエドルス版と、バブリウス版の同じ話を掲げる。

ファエドルス, I . 4 ¹⁴⁾

「肉をくわえて川を渡るイヌ」

他人のものを欲しがると自分のものをなくすのがおちです。

イヌが肉をくわえて川を泳いでいました。イヌは泳ぎながら、水面に移る自分の姿を見て、他のイヌが別の餌を運んでいるのだと思

い込みました。そして横取りしてやろうと思いました。

ところが、その欲ばりが裏目にでます。口にくわえていた餌はなくしてしまうし、取ろうと思った餌は手をふれることすらできませんでした。

バブリウス, 79¹⁵⁾

「肉をくわえたイヌ」

イヌが肉屋から肉を盗んで、ちょうど川沿いを通っているところでした。その流れに、今くわえているのよりもずっと大きい影が映っているのを見ると、イヌは肉を放り出して影に飛びかかりました。けれどもお目当てのものも、落としたものも見つかりませんでした。イヌはすきっ腹をかかえたまま、もと来た道を引き返していきました。

強欲な人の移り気な人生は、あれも欲しいこれも欲しいという空しい望みで滅ぼされるものです。

次に、epimythium のついたファエドルス版と、バブリウス版の同じ話をあげる。ファエドルス版の収録番号が後のものになればなるほど、「promythium + 本文」という構成から「(韻文の) 本文 + epimythium」という構成となっていていっている。

ファエドルス, IV. 3¹⁶⁾

「キツネと葡萄」

腹をすかせたキツネが、高い枝にぶら下がっている葡萄を取ろうと一生懸命跳び上がりました。しかし手が届きません。キツネは立ち去りながらこう言いました。

「お前はまだ熟れていない。すっぱい奴は取りたくない」

出来ないことを口で馬鹿にする人は、この先例に自分を当てはめ

てみるべきです。

バブリウス, 19¹⁷⁾

「キツネと葡萄」

丘のふもとの黒ずんだ葡萄の木から房が垂れ下がっておりました。抜け目がないキツネはたわわに実っているのを見ると、赤紫に色づいた実を手に入れようと、房めがけて何度も何度も跳ね上がりました。というのは房は熟しており、取り入れ間近だったのです。

しかし結局は、骨折り損のくたびれもうけ。房が手に届かなかったのです。立ち去りぎわ、キツネは口惜しきをごまかしながらこのように言いました。

「まだ葡萄はすっぱいのさ。思ったほど熟していないんだ」

バブリウス、ファエドルスとは別の系統に⑥のアウグスターナ I (Augutana I) がある。この集成は紀元後 1 世紀以後に作られた。さらに、⑧アウグスターナ I a (Augutana I a), ⑨ヴィンドボネンシス (Vindobonensis), ⑩プラヌーデス集 (Planudean) と続き、⑫レミキウス集 (Remicius) を介して、③ファエドロス版、④バブリウス版系統から⑤アビアーヌス集 (Avianus) と、⑪ロムルス集 (Romulus) が形成され、⑬のシュタインハーヴェル集 (Steinhöwel) の登場にいたる。そしてシュタインハーヴェル集は日本へのキリスト教布教に伴って我が国に入って成立した⑭天草本 (イソポのファブラス) と⑮古活字本 (伊曾保物語) へとつながっていく。

この論文で注目したい版本は、上には言及しなかった⑦の「G 本」である (系統図参照)。これは現存する最古の「イソップ伝」で、⑥アウグスターナ I の中のイソップの伝記の部分である¹⁸⁾。

II 寓話の歴史 その 2 - 日本の『イソップ寓話集』について

「G 本」をとりあげる前に、日本における「イソップ寓話」、その源流に

位置する天草本，古活字本について論じる。

日本に伝わっている「イソップ寓話」を見る上で、欠かせない版本が天草本『イソポのファブラス』と古活字本『伊曾保物語』である。前者は、日本で知られている最も古いイソップ寓話集成である。後者は、江戸時代初期約80年間に刊行された「仮名草子」の一つあった。天草本『イソポのファブラス』は1593年に発刊され、ローマ字で書かれており、この時代には珍しく、口語体である。しかも、室町時代頃の京都付近の方言で記されている。他方で、古活字本『伊曾保物語』は日本字で、文語体で書かれている。双方ともに、著者、訳者が明らかでない。天草本に関しては、「エソポが生涯の物語略」という書き出しで出典が明示されている。¹⁹⁾

ESOPO GA XO	エソポが生
gaino monogatari riacu	涯の物語略
COREVO MAXIMO PLANVDE	これをマシモ・プラヌーデ
toyu fito Gregono cotobayori	といふ人、希臘の言葉より
Latinni fonyacu xerarexi	拉丁に翻譯せられし
mono nari.	ものなり。

これにより、天草本の大元の原典はギリシア語で、「マシモ・プラヌーデ」という人物がラテン語に翻訳したということが読み取れる。このラテン語訳を日本語に訳したものが「天草本」である。この「マシモ・プラヌーデ」は、資料-1のイソップ寓話伝承系統図の⑩プラヌーデス集を作った人物である。一方で⑫レミキウス集、⑬シュタインヘーヴェル集を経て、他方では⑭ギリシア語ラテン語対訳版を経て形成された⑮ラテン語集成本を元にして天草本が作られたということがわかる。

日本に入ってきたイソップ寓話，天草本『イソポのファブラス』は、キリスト教布教に関連して、宣教師達の日本語教育のために作られた。このため、キリスト教が禁教になった時点で、天草本は抹消されていく。天草本はロー

マ字で書かれているため、一般の日本人には読めなかったというのも、他の一因であろう。しかし、幸いに大英博物館に原本が1冊現在も保存されている。一方、古活字本は、固有名詞を除いては、「翻訳物」というより、日本独自の仮名草子という印象を与える文語体で書かれている。キリスト教関連の本には見えないという事で、焚書を免れたのであろう²⁰⁾。このことについては、新村出氏が

『文祿舊譯天草本伊曾保物語』改造社の中で、次のように言っている²¹⁾。

彼程嚴重な吉利支丹御法度の中で焚書の厄を免れた『伊曾保物語』は元南蛮出なるにも拘らず、宗旨の方からは外道の作でも兎に角教訓物の有難さには、当時の新文明の産物であった活字で印刷され、慶長元和の頃世間に広まり、屢板重ね、絵まで挿まれ、ついに伝へて天保の水越の改革時分に教訓の近道として再び世に出たやうな始末で……

江戸時代初期には数種類の仮名草子『伊曾保物語』²²⁾が作られたが、次第に忘れられていった。だが、江戸時代末期（天保年間）に再び作られ、明治時代になると新たに西洋から「イソップ寓話集」が入ってきた。明治5年に、渡部温が Thomas James の『The Fable of Æsop』²³⁾の中から寓話を選択して訳し、『通俗伊蘇普物語』²⁴⁾を発行した。そして、明治33年以降、いくつかの「イソップ寓話」が「修身」または「国語」の教科書に採用されること²⁵⁾となった。さらに古活字本『伊曾保物語』は、明治28年に早稲田文学列伝小説史²⁶⁾で紹介されてから、よく知られるようになっていった。

しかし、天草本については、明治2年に「中外新聞」に「狼と羊のたとへの事」²⁷⁾が載せられ、次のように紹介されたにもかかわらず、当時の関心は薄かった。²⁸⁾

此文は西曆1593年即ち今を去ること277年前の板本にて西洋字を以て日本字を書きたる本の権輿なりとて、英国の書庫中にて見出した

るを彼国の新聞紙に出せるなり。

ところが明治21年、Ernest Satow が私版で発行した『日本耶蘇会刊行書誌』という本の中に「イソップ寓話」も含まれていたという経緯があり、「イソップ寓話」は、次第に注目されていった。明治30年代になると大英博物館に所蔵されている原本の写真版が広まる。明治41年から42年にかけて新村出氏が、原本を手写しで持ち帰り、発表している。

さて、古活字本、天草本を見ていく上で重要な参考資料として、⑬シュタインヘーヴェル集がある。これの本文はラテン語で、小堀桂一郎氏の研究によると、近代ロマン語系の言葉（ポルトガル語、スペイン語）などに訳されている。これは、天草本、古活字本にもある部分の内容が一致している資料である。シュタインヘーヴェル集の構成は次のとおりである。

第1部 「イソップの生涯」²⁹⁾。

第2部 「ロムルス寓話集」(Romulus 集) 4巻80話。³⁰⁾

第3部 「選外寓話集」(Extravagantes 集) 17話。³¹⁾

第4部 「レミキウス集」(Remicius 集) 17話。³²⁾

第5部 「アヴィアーヌス集」(Avianus 集) 27話。³³⁾

第6部 「ペトルス・アルフォンスス集」(Alphonsus 集) 15話。³⁴⁾

第7部 「ポッヂウス笑話集」(Poggius 集) 7話。³⁵⁾

資料-2を見ていただきたい。シュタインヘーヴェル集を基準にすると、古活字本と天草本は、省略されている部分はあるが、シュタインヘーヴェル集の流れをくむ版本だと言える。

古活字本と天草本を比較するとその内容・構成には不一致が見られる。特に下巻の部分で、その不一致が明らかである。古活字本の上巻、中巻、天草本の上巻とはシュタインヘーヴェル集とよく一致しているが、それぞれの下巻に関しては、かなりな不一致が見られる。

天草本と古活字本の成立年代には差がある。それから推測するに、天草本の下巻に載っていない話を古活字本の下巻に採用したのではないかと考えら

れる。つまり、古活字本、天草本以外の「イソップ寓話集」が存在したのではないかと思われる。すなわち、これら2つのイソップ寓話集の共通部分には、それらの元本としての手稿本『原伊曾保物語』⑰（日本語、日本文字、文語体、1590年頃）が存在したと推定される³⁴）が、非共通話の部分は、これとは別系統の集成から採録されたと考えられる。

III イソップ伝の中の『鷲と甲虫』について

以上、「イソップ寓話」各集成の伝承経路と、日本で編纂された「イソップ寓話集」（古活字本・天草本）を中心に、寓話部の構成を見てきた。次に注目したいのは「イソップ伝」である。

イソップの生涯が最も詳細に語られているのは、現存する最古の写本の「G本」（ギリシア語版本）である。この版本の粗筋は次のとおりである。イソップは、運命によって奴隷として生まれ、容姿は極めて醜く、耳は聞こえていたが、口は利けなかった。しかし、道に迷っていたイシス女神に仕える神官に親切にしたことで、女神の恩恵を受け、人並み以上に話す才能を授かる。そして、その才知を生かし、やがて隷属状態から抜け出し、様々な都市で厚遇を受ける。特にリュディア王、バビロニア王から厚い信任を受けるが、諸国漫遊の最期の地デルフォイで罾におとしいれられ、無実の罪を着せられ処刑される。

その最期の地デルフォイで、イソップが語ったとされる7種類の寓話³⁶）が「G本」には収録されている。そして、その重要な寓話として『鷲と甲虫』³⁷）がある。ところが、イソップ伝がついている「G本」以外の集成、例えば、古活字本や天草本を見ると、『鷲と甲虫』は収録されておらず、『鼠と蛙』³⁸）のみが収録されている。³⁹）また、ラ・フォンテーヌの「寓話」には、『鷲と甲虫』は収録されてはいるものの、完全な形ではなく、省略されたしかたでしか収録されていない。⁴⁰）

これは重要な変化である。というのも、本来のイソップ伝にあっては『鷲と甲虫』こそイソップの最期というテーマにかかわる大切な寓話だからであ

る。他方、『鼠と蛙』をみると、この話ではイソップの死はあくまでも、天から降ってきた災難のように描き出されていて、単なる復讐話として読み取れる。ところが、後代には省略されてしまうことになる『鷺と甲虫』は、イソップがデルフォイにやってくるまでになした様々な行為や功績が複雑に絡み合っただされ一つの運命的結末を示唆するものとして設定されている。

これら二つの寓話をみておく。まず「G本」にあげられている『鼠と蛙』の粗筋を述べる。鼠と蛙が仲良くなって、鼠が蛙を夕食に招待する。そのお礼に今度は蛙が鼠を招待し返すのだが、蛙の住んでいるところは水の中、泳げない鼠は、蛙に促されて、自分の脚を蛙の足に括り付けられていたものだから、そのまま水の中に引きずり込まれて、溺れ死んでしまう。しかし、鼠は溺れながらも、「死んでも復讐してやるぞ」と呪いの言葉を発する。そこにワタリガラスが飛んできて、鼠といっしょに蛙を食ってしまう。そこで、この話はデルフォイ人に対するイソップの次のような言葉で締め括られている。

私もまた同様に、人々よ、たとえ死んだとしても、君たちに祟ってやるだろう。というのも、リュディア人、バビロニア人、それから全ギリシアのほとんどの人々が、私の死花を咲かせてくれることになるだろうから、と。(Perry “AESOPICA” CODE G 133)

このように、この話には「復讐」のメッセージ以上のものは含まれていないのが読み取れる。

次に『鷺と甲虫』の梗概を記す。この寓話は「G本」には『鼠と蛙』の後に置かれている。デルフォイ人達の追跡を避けて、イソップはムーサ女神の神殿に立てこもり、『鷺と甲虫』の話をする。兎が鷺に追い掛けられて、甲虫の所に逃げ込むが、鷺は甲虫を馬鹿にし、ゼウスにかけて誓った甲虫の願いを無視して、兎を食べてしまう。それに腹を立てた甲虫が、鷺の産んだ卵

をことごとくつぶしていく。それに困り果てた鷺は、オリュンポスの山の頂に住むゼウス神に頼んで卵を預かってもらうのだが、甲虫の別名フンコロガシという通り、糞まみれになって、ゼウスのそばへ飛んでいき、その糞を撒き散らかして、ゼウスをあわてさせ、卵をこわさせてしまう。ゼウスはここまで執拗に甲虫が鷺の卵を狙いつづけるには何か理由がある、鷺に不正なことをされたのだと気づき、鷺を諭し、甲虫をなだめる。甲虫はまた、鷺は、甲虫自身に不正をしただけでなく、ゼウスをも冒瀆したのだと訴える。というのも、甲虫が、ゼウスにかけて誓いをたて、兎を助けてくれるように懇願したのにもかかわらず、それを畏れもせずに殺したからである。こんなことになっては、鷺の種族が根絶やしになってしまうので、ゼウスは甲虫と鷺に和解を勧めるが、うまく行かず、結局、ゼウスは、鷺の産卵時期を甲虫のいない時期に変えてしまう。この寓話には、次のようなイソップの言葉が付け加えられている。

同様にして、君たちも、デルフォイの人々よ、私が難を避けたこの神殿を、たとえ小さいからといって、侮ってはならないのだ。甲虫のことをよく心に刻み、客人を遇するゼウス（ゼウス・クセニオス）ならびにオリュンポスのゼウスを畏れるように。(Perry “AESOPICA” CODE G 139)

ここでは小さく、弱い甲虫が、ムーサ女神たちの小さな神殿、すなわち嘆願者を保護する避難所（アジール）に対応するものとして捉えられている。古活字本や天草本、ラ・フォンテーヌの「寓話」と違って、「G本」ではイソップの非業の死は決して偶然ではなく、一つの必然的帰結として叙述されているのであって、その必然的帰結を締め括るものとして、『鼠と蛙』ではなく、『鷺と甲虫』という寓話が語られているのである。

『鷺と甲虫』では、兎がイソップに、鷺がイソップを殺すデルフォイ人に、甲虫が復讐者に喩えられている。「G本」では、イソップが逃げ込んだのは

ムーサの小さな神殿なので、小さい甲虫に喩えられたものと思われる。これには、後にデルフォイを襲うことになる疫病や戦争も予告されている、と考えられる。ところがこのモチーフは『鼠と蛙』の話でも読み取られる事ができるもので、そこでも、鼠がイソップに、蛙がデルフォイ人に、カラスあるいはトビが後にデルフォイを襲うことになる疫病、戦争に喩えられるという形ですでに提示されていたのである。つまり、2つの異なる寓話が同じモチーフでの復讐話として、イソップ伝に組み込まれているのである。これでもか、これでもかとたたみかけて、訴えているイソップの状況を想像できる。イソップ伝を読む限り「復讐話」としての側面が非常に濃く現われているといえるだろう。しかし、イソップの運命を暗示するものとしては、『鷲と甲虫』の話のほうがうまく出来ている。「G本」では、冒頭から、イソップとムーサ女神たちとの深い因縁を持ち出している。イシス女神の神官を助け、そのお礼として、イシス女神はムーサ女神達を引き連れて、イソップに恩恵を授けたのであった。その結果、イソップはムーサ女神達を深く信仰することになったのである。ムーサ女神達は芸術の神であるが、デルフォイの神託の神であるアポロンも同じ芸術の神である。位階、力ともに、ゼウスの息子であるアポロンのほうが上であるのに、イソップがアポロンを祀らなかったため、アポロンは立腹したのである。イソップに対して仕置きをするために、彼は自分の首座であるデルフォイにおびき寄せ、殺したのである。すなわち「G本」では、ムーサ女神達とアポロンとの対抗関係がイソップの運命に大きく作用するものとして描き出されている。『鷲と甲虫』の話は単純な「復讐話」以上のものとなっている。後代のイソップ伝では『鷲と甲虫』の寓話は次第に省略されていくことになるが、イソップの最期にかかわる寓話としては、本来は『鷲と甲虫』の方がメインのもので、重要な意味を付与されていたものと推察される。

IV アリストファネスの人物像とその喜劇作品における

『鷺と甲虫』の扱い

イソップ寓話集の伝承の中では、先述したように『鷺と甲虫』の話は次第に消去されていったが、古代ギリシアの伝統においては、『鼠と蛙』の話よりも一層よく知られていたと思われる。その証拠として、まず一つには、イソップ伝とは関係ないところで、紀元前6世紀後半から5世紀前半のシモニデスがこの寓話に言及しているということがある。シモニデスの『鷺と甲虫』⁴¹⁾の話には、復讐話という面もあらわれているが、鷺と甲虫の産卵に関しての因縁話の側面も、強く打ち出されている。甲虫の執拗なまでの鷺に対する復讐を、ゼウスがあらためて詮議し、鷺のためにも産卵時期を変えろという形で決着をつけさせたという話になっている。「因縁話」という側面が濃くでている構成になっていて、寓話部に掲載されている『鷺と甲虫』⁴²⁾もある。さらに、この寓話が古代ギリシア人によく知られていたもう一つの証拠として、アリストファネスの喜劇作品にかなりの頻度で使用されているという事実をあげることができる。

アリストファネスは紀元前445年から380年ごろにかけて生きたギリシアの喜劇作家で、約40の喜劇作品を作り、11篇が残っている。その内の『蜂』『平和』『女の平和』の3編に『鷺と甲虫』の寓話が現われる。

『蜂』 頑固な裁判マニアの父親ピロクレオンを息子のブデリュクレオンが裁判所に出かけていくのをやめさせようとするのだが、すべては徒労に帰し、ついには父親を家の中へ閉じ込める。次に挙げるのは父親のピロクレオンが息子によって無理やり家の中に引っぱり込まれるときに語るセリフである。

ピロクレオン：デルフォイの人々があるときイソップを

ブデリュクレオン：そんなことはどうでもいいや。

ピロクレオン：神様の器を盗んだと咎めたとき。しかしイソップが彼らに言うには、昔々かぶと虫が。

ブデリュクレオン：こん畜生、あなたもかぶと虫もみんないっしょに消えてなくなれ。⁴³⁾

この様に、息子ブデリュクレオンが父親のピロクレオンの話に耳を貸さずに、途中で切ってしまうのである。

このシーンのピロクレオンは、自らを兎に、彼の未来の復讐者を甲虫に、息子のブデリュクレオンを驚に喩えている。この話では『驚と甲虫』の結論である「復讐」は成立していない。したがって甲虫の存在が何を意味するかははっきりしていない。また、無実の罪で死刑が待っていたイソップと、正当な罪で出口が待っていたピロクレオンとの間には違いがある（ピロクレオンは盗みや、フルートを壊したという罪を犯しており、舞台から出て行かなければならないということが待っていた）。ピロクレオンは、まわりから相手にされず邪魔者扱いをされている自分を、身勝手にも哀れなイソップに位置付けようとしたのである。

『平和』 これは、ペロポンネソス戦争が長びくのに業をにやしたトリュガイオスが、エウリピデスの悲劇に登場するベレロフォンのように天馬のペガサスに乗って天に上り、ゼウスに直訴しようというのである。つまりその事によって、アリストファネスはエウリピデスの『ベレロフォン』のパロディを意図したものと考えられる。登場人物トリュガイオスは、ゼウスのところにたどり着けたのは甲虫だけだと語り、巨大な甲虫に乗って、（お芝居であるから、作り物の甲虫）ぶらぶらとつるされ、天に向おうとする。そのみっともない甲虫に乗ろうとするところで、トリュガイオスとその娘の間に、次のようなセリフのやりとりがある。

娘：だけど、お父ちゃん、黄金虫に馬具をつけて、神様のところに乗

って行こうというのはどういう気なの。

トリュガイオス：イソップの話（λόγος）にあるんだよ，翼あるもののなかでこいつだけが神様のところへ行けたんだってね。

娘：お父っつあん，お父っつあん，そりゃ嘘（μῦθος）よ，こんなくさい虫が神様のところへ行けたなんて。

トリュガイオス：鷲に対して憤慨して，大昔行ったんだ。卵をころがし落として復讐したんだ。⁴⁴⁾

トリュガイオスのセリフの中での「イソップの話（λόγος）」は「真実」を意味し，娘のセリフ「そりゃ嘘よ」つまり「それは物語（μῦθος）よ」には，「絵空事」を意味する。イソップ寓話を λόγος と言って「真実」としているか，μῦθος と言って「全くの作り事」と解するかによって，トリュガイオスと娘の「イソップ寓話」に対する評価のちがいが分かる仕組みになっている。

この喜劇作品では「甲虫」が，神話にあるペガサスに乗ってのベレロフォンの天上への飛翔の，もう少し深読みすれば，エウリピデスの悲劇作品『ベレロフォン』のパロディの主演としての役割をもたされている。その上，そのパロディは「イソップ寓話」の「鷲と甲虫」にも及んでいて，トリュガイオス自身は甲虫に，ゼウスは鷲に，兎はペロポネソス戦争でボロボロになっているギリシアに，それぞれ喩えられているのである。このアリストファネスの喜劇作品にあらわれる話では，ゼウスと甲虫の役割は寓話『鷲と甲虫』の文脈と比べて微妙な仕方で変えられている。小さくけなげな甲虫は巨大で滑稽な乗り物に，ゼウスは鷲の保護者で仲裁者の立場から戦を起している張本人として告発される側の役割へ，とそれぞれ変えられている。

『女の平和』 これも長びく戦争にあきあきしているアテネで上演されたものである。アテネの若い婦人リュストラテが，アテナイとスパルタとの間に平和をもたらすために，全ギリシアの女の代表を集めて，戦いを止める

までは、男に対して決して情交を許さないというセックスストライキを決議して、アクロポリスに立てこもる。これに対して男たちは女たちを煙で燻し出そうとするが、女たちはそれに抵抗して水をかけて消したり、と大騒動になる。さらに男たちはアクロポリスに保管してある国庫の金を海軍建設のために引き出そうとしに来るが、女たちに追い払われてしまう。やがて女達の方も、子供や夫の事が心配になり、脱走しようとする者もあらわれてくる。男達の方も困り果て、スパルタからの和平の使者が来たり、女の頑強なストライキに耐えかねたこともあって、最終的に平和がおとずれるということになる。

次のセリフは、劇の半ばあたりで男女別のコーラス隊が言い合っている部分で、女のコロスが復讐を誓う言葉である。

驚の卵をねらいよる

甲虫になってやるぞ。⁴⁵⁾

『女の平和』では、戦好きな男を驚に、女を甲虫に喩えている。男に対する女のセックスストライキや男が女をアクロポリスから燻し出そうとするときの猛烈な態度は、ゼウスでさえ防ぎきれなかった甲虫の驚に対する復讐行為のイメージと重なり、『驚と甲虫』の文脈に沿うものとなっている。イソップ寓話の驚と甲虫は最終的に和解するにいたらなかったが、『女の平和』では、対立しあう男と女は何とか仲直りし、和解できたのである。

以上、アリストファネスの3つの喜劇作品にあらわれるイソップ寓話は、どれもごく短い言葉で言及されるにすぎない。『驚と甲虫』の話を全部語っているのではなく、一言、二言話しているだけである。『蜂』では、「イソップがいうには……」と「昔々甲虫が……」のみ。『平和』では、「黄金虫（甲虫）が神様（ゼウス）のところへ行った」としかでていない。『女の平和』では、甲虫が驚の卵を狙い、これをことごとく壊すということだけである。

たったこれだけの言葉で、『驚と甲虫』の話であるということがわかってしまう。このことが何を意味するのかといえば、それはこの寓話がアテナイの一般大衆に熟知のものであったということに他ならない。一般に知られていないならば、ディテールの全てを語る必要がある。それが語られていないのは、『驚と甲虫』の話が、この時代のアテナイ社会に広く一般に普及していた「復讐話」であったからだと考えられる。デルフォイ人達がイソップを殺したということ、ゼウスでさえ、驚の産卵時期と甲虫のあらわれる時期を変えることでしか甲虫の復讐から驚を守れなかったということ。これらは、当時の人々にはきわめてポピュラーな話だったのである。

次に注目したいのは、この『驚と甲虫』の話が、「イソップの～」という前置きをつけて語られているという事実である。『驚と甲虫』の話に限った事ではない。アリストファネスの喜劇には、他にも『イソップ寓話』⁴⁶⁾が出てくる。『蜂』では「驢馬の蔭」「イソップと牝犬」「シュバリスの男」「シュバリスの女」「驚と甲虫」の5つの寓話。『平和』では「驚と甲虫」のみ1話、『鳥』では「父親を埋葬する雲雀」「驚と狐」「射られた驚」の3つの寓話が出てくる。また『女の平和』では「驚と甲虫」のみ1話。『アカルナイの人々』では「王に選ばれた猿と狐」1話。こうして5作品中にイソップ寓話が11回出ている。「驚と甲虫」の話は、3作品に用いられ、アリストファネスにはお気に入りの寓話であったのだろうかと推測する。では「イソップの～」という前置きは、何を意味するのだろうか。「イソップの～」という前置きはそれだけで直ちに「イソップ寓話」を指し示す働きをもっていたのだと考えられる。登場人物など、2, 3語語るだけで、「どういう内容の寓話」をしめしているのかも、喜劇の観客達にははっきりとわかったのである。

V アリストファネス喜劇におけるイソップ寓話の役割

アリストファネスが寓話を利用するやり方は、イソップ伝の「G本」のそれとは随分違っている。アリストファネスは寓話そのものが意図していることには重点をおかず、聴衆がそれを知っていることを前提にして、登場人物

の役割や性格などを誇大化して見せている。「寓話」は教訓や諷刺を含んだたとえ話であるが、アリストファネスの喜劇作品ではそれらの要素は一捻りされ、パロディ化され、「笑いをとる」要素へと転化されている。

喜劇作家アリストファネス（前445－385年）の最盛期は、30年にわたるペロポネソス戦争期と重なっている。古き良き時代の平和を懐かしみ、新時代の流行思想やソクラテスの啓蒙運動に反対する保守主義者として、彼は常に時流に反対し、主戦論が横行する帝国主義の世相を斜めに見て、デマゴグという民衆煽動家たちを批判・攻撃し、一貫して平和を擁護しつづけた。

今回取り扱った彼の作品のうち、『蜂』は当時の陪審員制度を痛烈に批判した作品で、登場人物ピロクレオンは、デマゴグによって、巧みに道具として操られながらもそれを自覚し得ないままに権力に酔う、愚かな民衆を代表するものであったのであった。その偽りの権力は、実の息子によって粉碎されてしまう。

『平和』は紀元前421年に上演されたが、それはニアキスの平和によって一時の小康が得られたときであった。そのような状況で生まれたせいも、これはとてつもなく愉快的な作品で、その結末は次のようになっている。ペロポネソス戦争が長びいているのに文句を言うために、トリュガイオスが、巨大な甲虫に乗ってゼウスが鎮座しているはずのオリュンポス山の頂に行ってみると、当のゼウス神は長びく戦争に嫌気がさして、さらに上のほうへ引っ越してしまっていたというものである。神様も手のほどこしようがない状況になっているのだ。「戦争」の神が、「平和」の女神たちを押し込めて、戦争の要因の国々を一まとめてサラダにしようとするが、スリコギが見つからない。それを探している間に、トリュガイオスが「平和」の女神達を救い出す。そういう結末になっている。

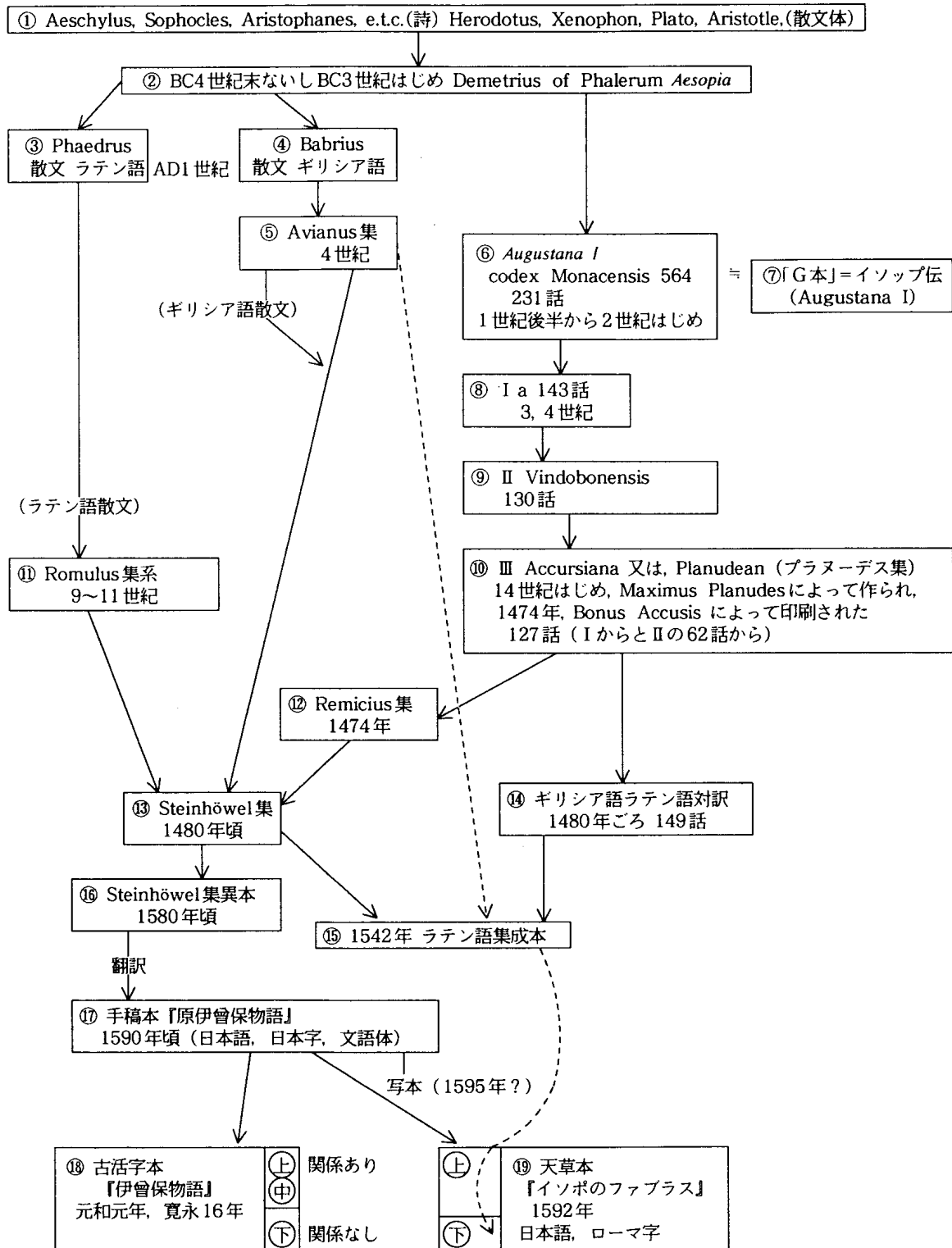
紀元前411年に上演された『女の平和（リュシストラテ）』は、紀元前413年における無謀きわまるシシリア遠征とアテナイ海軍の壊滅を機縁として醸成されたアテナイ社会のヒステリックな状況を背景として、戦禍に倦んだ市民の声を代弁するものとして作られた作品であった。この喜劇の主人公は

「リュシストラテ」というが、これは「軍を解く女」というほどの意味の名で、その名のとおり、戦争を止めさせるために決起して行動を起こすのである。その行動は、滑稽で猥褻な様子だが、その裏には、アリストファネスの悲壮なまでの平和への希求が隠されていたのである。

「イソップ寓話」、そしてこの論文で扱った『驚と甲虫』は、アリストファネスにとって、そのような希求を表現する手段として、格好のものであったのである。

資料-1

イソップ寓話伝承系統図



イソップとアリストファネス喜劇

資料-2

イソップ伝、寓話対応表-古活字本中心

古活字本	古活字本題名	天草本	G本	Aesopica	Steinhöwel集
上 1	本国の事	①, ⑤	1, 20-27		1, 3, 5
上 2	荷物のもつ事	④	17-19		4
上 3	柿をときやくする事	②, ③	2-3		1
上 4	のう人のふしんの事	⑥	35-37		7
上 5	けだものゝしたの事	⑦	51-55		11
上 6	風呂の事	⑧	65-66		13
上 7	しやんとうしほをのまんとけいやくの事	⑨	68-74		15
上 8	くわんかくの文字の事	⑩	78-80		18
上 9	さんの法の事	⑫	81-91		19
上10	りひやよりちよくしの事	⑫	92-97	153	19, 20
上11	伊曾保りいひやの国にゆく事	⑬	98-100	387	20
上12	伊曾保りいひやに居所を作る事		101		20
上13	商人かねをおとす公事の事				A1-4
上14	中間さふらひと馬をあらそふ事				
上15	長者と。他こくの商人の事				A1-1
上16	いそほ二人のさふらひゆめ物がたりの事				A1-5
上17	いそほ諸国をめぐる事		102		21
上18	いそほ養子をさだむる事	⑭	103-104		21
上19	ねたなを帝王不審の事	⑭	105-106		22
上20	えりみほいそほが事をそうもんの事	⑭	107-108		22
中 1	いそほ子息にいけんの条々	⑯	109-110		23
中 2	えしつとの帝王より不審の返答の事	⑮	111-116		24
中 3	ねたなを。いそほに尋玉ふ不審の事	⑰	117-118		24
中 4	いそほ。帝王にこたふる物がたりの事				25, A1-8
中 5	学匠ふしんの事	⑱	119-122		25
中 6	さふらひ。鵜鷹にすく事				Po-5
中 7	いそほ。人にせうぜらるゝ事				
中 8	いそほ。ふうふの。中なをしの事	⑪	44-50, 123		10
中 9	いそほ。臨終におひて。兎蛙の譬を引て終こと。	⑲	(133)	384	26, I-3
中10	いそほ物のたとへを引ける条々			503	I 巻序文, 1
中11	狼とひつじとの事	上1		155	I-2
中12	いぬとひつじとの事	上2			I-4
中13	いぬしゝむらをくハへて川をわたること	上3		133	I-5
中14	師子王。ひつじ。牛。野牛のこと	上4			I-6
中15	日輪と盗人の事				I-7
中16	鶴と狼との事	上5			I-8
中17	しゝわうとろばろとの事				I-11
中18	京といなかのねすみの事	上6		352	I-12
中19	きつねとわしとの事			1	I-13
中20	わしとかたつぷりとの事	上7			I-14

古活 字本	古活字本題名	天草本	G 本	Aesopica	Steinhöwel 集
中21	からすときつねとの事	上8			I -15
中22	馬といぬとの事	上9			I -17
中23	しゝわうとねずミの事	上10		150	I -18
中24	つばめと諸鳥との事	上11		124	I -20
中25	かはづが主君をのぞむ事	上12		44	II 巻序文, 1
中26	とびとはととの事	上13		486	II -2
中27	からすときじゃくとの事	上15		219	II -15
中28	はいとありとの事	上16			II -17
中29	いたちわねにかゝる事				II -19
中30	うま。師子王をたばかりしこと	上17			III -2
中31	しゝわうとはすとの事			563	III -1
中32	馬とろばとの事	上18		357	III -3
中33	諸鳥とけだものとたゝかひの事	上19		566	III -4
中34	かのしゝひとりごとといひしこと	上20			III -7
中35	にはとりときつねとの事			252	* -1
中36	腹と五たいの事	上21		130	III -16
中37	人とろばとの事				III -18
中38	狼とはすとの事	上22			IV -3
中39	さると人との事				IV -8
中40	しゝわうとろばとの事				IV -10
下 1	ありとせミとの事	上23		373	IV -17
下 2	おほかミといのしゝとの事				Ex-2
下 3	きつねと鶏とのこと			562 a	Ex-3
下 4	たつと人との事			640	Ex-4
下 5	馬とおほかミとの事			696	Ex-7
下 6	おほかミときつねとの事	上24		345	Ex-9
下 7	おほかミゆめ物がたりの事				Ex-10
下 8	鳩とありとの事	上25		235	Re-11
下 9	おほかミといぬとの事			135	Ex-12
下10	きつねとおほかミとの事			705	Ex-14
下11	野牛とおほかミの事				Ex-15
下12	わしとからすとの事	下29		2	Re-1
下13	しゝわうとろばの事				
下14	野牛ときつねのこと	下30		9	Re-3
下15	ある人ほとけをいのる事				Re-6
下16	ねずみとねことの事			79	Re-8
下17	ねずミどもだんかうの事			613	
下18	おとこ二女をもつこと			31	Re-16
下19	がざミの事				Av-3
下20	くじゃくとつるとの事			294	Av-12
下21	人をねたむハ身をねたむと云事			580	Av-17

イソップとアリストファネス喜劇

古活字本	古活字本題名	天草本	G 本	Aesopica	Steinhöwel 集
下22	かいるとうしとの事			376	II-20
下23	童子とぬす人との事			581	Av-18
下24	修行者の事				Av-22
下25	鶏こがねのかいごをうむ事			87	Av-24
下26	さるといぬとの事			218	Av-25
下27	かはらけまんきをおこす事				Av-26
下28	鳩ときつねとの事				
下29	出家とゑのこの事				Po-7
下30	人の心さだまらぬ事				
下31	鳥。人にけうけをなす事			325	Al-6
下32	鶴ときつねの事			425	II-13
下33	三人よきなかの事				Al-1
下34	出家とぬす人の事				

注

古活字本 上1—上巻 第1話の意 中1—中巻 第1話の意 下1—下巻 第1話の意
『万治旧版 伊曾保物語』百華書房、朝野書店刊・十銭文庫5
天草本 ○数字(①, ⑤) - 形式段落便宜上つけた。
上1—上巻 第1話の意, 下29—下巻 第29話の意

吉利支丹文学全集2 東洋文庫平凡社

G 本 イソップ伝一段落番号 Aesopica—ギリシア語写本 寓話部 第__話

Steinhöwel 集 数字のみ—イソップ伝記部, 段落番号

ローマ数字および、略号、記号は以下のとおり

I—IV—Romulus 集(ロムルス寓話集) 巻数-第__話,

Ex—Extravagantes 集(選外寓話集)-第__話,

Re—Remicius 集(レミキウス集)-第__話,

Av—Avianus 集(アヴィアーヌス集)-第__話,

Al—Alphonsus 集(アルフォンスス集)-第__話,

Po—Poggius 集(ポッヂウス笑話集)-第__話, *—補遺1話

注

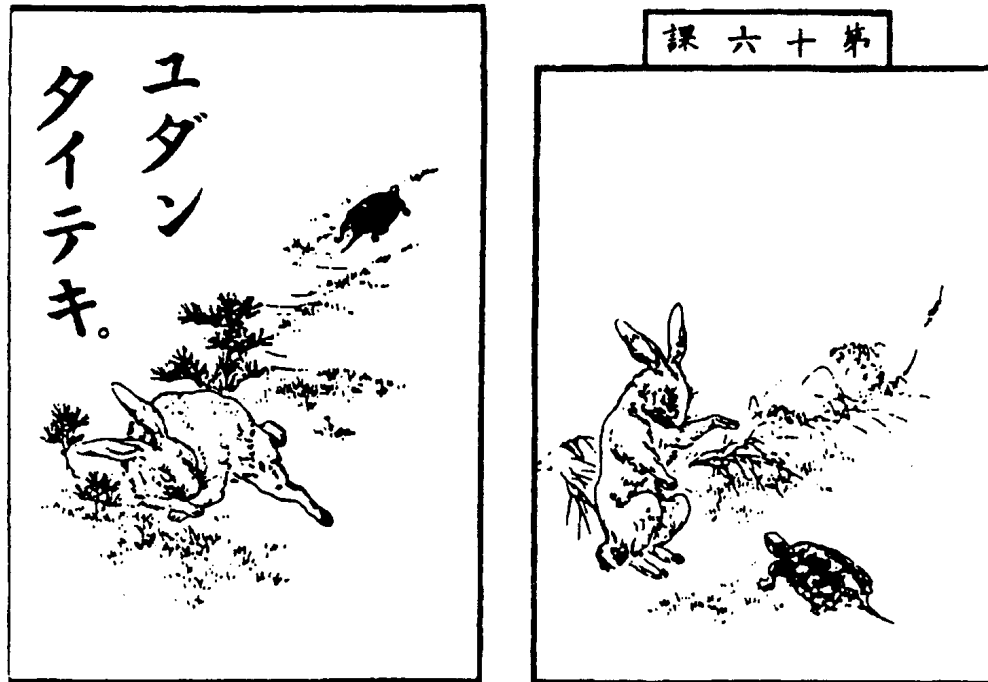
1) 本来「甲虫」はコウチュウ目の昆虫の総称であり、外皮、上翅が堅い昆虫を指す。

ギリシア語原典では“κάvθapoc”という。イソップ寓話での「甲虫」は、あの頭に立派な角を持つ「甲虫」ではない。別名「フンコロガシ」=「スカラベ」というもの名もある。ここでは「甲虫(カブトムシ)」という訳語をあてた。

2) 柳田國男が「文字でかかれた文学に対して、口伝えによる文芸を「口承文芸」(伝承文学と同意)」と呼んだ。神話・昔話・伝説・叙事詩・寓話・諺・唱歌と・なぞなぞ・民謡・わらべうた・語りものなど、広く口伝えの文芸全体をさすことばである。この名を用いたのはフランスのポール・セビオという民俗誌家が

最初。『柳田國男全集 8』ちくま文庫1990年、『児童文学はじめの一步』世界思想社を参照。

- 3) 例えば『日本教科書大系』講談社刊行「新編修身教典」、尋常小学校用巻一には、よく知られている「兎と亀」が収録されている。



他にも昭和8年から13年までに刊行された「小学国語読本」には「獅子と鼠」が収録されている。



- 4) イソップ寓話伝承系統図（資料－1）

- 5) 紀元後4世紀のユリアヌス帝が『第七弁論』207Cでイソップ寓話について次のように述べている。

But the Homer of myths, or their Thucydides, or Plato, or whatever we must call him, was Aesop of Samos, who was a slave by the accident of birth rather than by temperament, and he proved his sagacity by this very use of

fable. For since the law did not allow him freedom of speech, he had no resource but to shadow forth his wise counsels and trick them out with charms and graces so serve them up to his hearers. (WILMER CAVE WRIGHT, Ph. D., *THE WORKS OF THE EMPEROR JULIAN*, Loeb Classical Library, p. 81 を参照。)

パエドルス／バブリオス 『イソップ風寓話集』 岩谷智・西村賀子訳国文社をも参照。

6) 正義について

さてここで殿様方に一物事の理を弁えた方々ではあろうが
譬え話を一つお聞かせしよう。

鷹は斑入りの頸の夜鶯にむかってこういった一

爪にしっかりと掴まえて、空高く雲の中を運んでいたが、

小鳥は曲った爪に身を貫かれ、憐れ気な声で泣いている。

鷹は居丈高に、小鳥にむかっていうには、

「おかしい奴だな、何を泣きわめいておる。お前は小鳥より

ずっと強い者に捕らわれているのだぞ。

お前は歌の上手であるといっても、俺の連れてゆくままに、

どこへなりと行かねばならぬ。

俺はお前を食ってしまうことも、放してやることもできる。

おのれより強いものに刃向かおうとするのは愚か者じゃ。

勝てぬばかりか、恥をかく上に痛い目にも会うからな。」

羽根長く、疾風のごとく空翔ける鷹は、こういったのだ。(『仕事と日』202行
～205行 松平千秋訳)

7) むしろまるでイソップの話しそっくりに、狐がライオンに言ったとおり、スパルタへは行って往く貨幣の足跡は、いずれもはっきりとその方向をさしているのであるが、そこから出てくるものの足跡は、誰も見ることができないのである。

(「アルキビアデス」123a 岩波版『プラトン全集』)

8) ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学列伝』第5巻81によると、アリストテレスの孫弟子にあたるファレロンのデメトリウス(紀元前350年頃～283年頃)は、アテナイの外港ファレロン出身で、アテナイで10年間にわたり僭主の位についていたが、その後紀元前307年に追放された。彼が編纂した『アエソピカ』は、追放後、アレクサンドリアに移ってからだと考えられる。イギリスのマンチェスターにあるジョン・ライランズ図書館所蔵の14編の散文寓話を含むパピルス

が『アエソピカ』の一部でなはいかと考えられるが、確定的ではない。パエドルス／バブリオス『イソップ風寓話集』岩谷智・西村賀子訳国文社 p.p.328-329を参照。

- 9) Ben Edwin Perry, *BABRIUS and PHAEDRUS*, Loeb Classical Library, p. p. xiii-xiv 参照。
- 10) ガイウス・ユリウス・ファエドルス (Gaius Iulius Phaedrus) の生涯についての資料は乏しく、彼の著書の前書きに、トラキアの伝説詩人オルペウスと同郷とみなしていること、ギリシアにより近く生まれていることを誇っているのをあわせて、ギリシア北方あるいは、マケドニア、トラキア生まれと推測できる。奴隷の身分であったが、優秀なため、芸術や、学問を十分に学ぶ機会に恵まれ、アウグストゥスの屋敷の奴隷となった。パエドルス／バブリオス『イソップ風寓話集』岩谷智・西村賀子訳国文社 p.p.335-336を参照。
- 11) ギリシア語で詩を書いているバブリウスの生涯についてもはっきりした資料は残っていないが、名前からしてイタリア中部、北部出身ではないかと推測される。古代ウンブリアの氏族名である。ローマ系詩人であり、彼のギリシア語の特徴にラテン語や、ラテン詩の技法が現われている。パエドルス／バブリオス『イソップ風寓話集』岩谷智・西村賀子訳国文社 p.p.350-351を参照。
- 12) バブリウスの新作の可能性のある話は、約200話のうち72話と考えられる。パエドルス／バブリオス『イソップ風寓話集』岩谷智・西村賀子訳国文社 p.331を参照。
- 13) Ben Edwin Perry, *BABRIUS and PHAEDRUS*, Loeb Classical Library, p. p. xv-xvi 参照。
- 14) パエドルス／バブリオス『イソップ風寓話集』岩谷智・西村賀子訳国文社 p.17を参照。
- 15) パエドルス／バブリオス『イソップ風寓話集』岩谷智・西村賀子訳国文社 p.241を参照。
- 16) パエドルス／バブリオス『イソップ風寓話集』岩谷智・西村賀子訳国文社 p.87を参照。
- 17) パエドルス／バブリオス『イソップ風寓話集』岩谷智・西村賀子訳国文社 p.196を参照。
- 18) 「G本」イタリアのローマ近郊のフラスティカにあるグロッタフェラ修道院の文庫に保存されていたギリシア語写本。
- 19) 翻字は、新村出『天草本伊曾保物語』岩波文庫から参照。「エソポが生涯の物

語略」冒頭部の実写版（コピー）は、島正三／編『天草本伊曾保物語などのこと
III』文化書房博文社から参照。

ESOPO GA XO⁴⁹⁹

gaino monogatari riacu.

COREVO MAXIMO PLANVDE

toyū fito Gregono combayori Latinni fon-
yacu xerarexi mono nari.

ESOPO GA XO

gaino monogatari riacu.

COREVO MAXIMO PLANVDE

toyū fito Gregono cotobayori
Latinni fonyacu xerarexi
mono nari.

- 20) 島田清太郎『イソップ伝の研究』中央公論事業出版 p.8を参照。
21) 新村出『文祿舊譯天草本伊曾保物語』改造社「一西洋文學翻譯の嚆矢」p.3を
参照。
22) 『十行本元和版』、『十二行本寛永十六年版』、『十二行寛永無刊記版』など。

23) Thomas James, *ÆSOP'S FABLES*, 扉絵



24) 渡部 温訳『通俗伊蘇普物語』扉絵



- 25) 3) に同じ。
- 26) 島田清太郎『イソップ伝の研究』中央公論事業出版 p.6を参照。
- 27) 資料-2 イソップ伝, 寓話対応表-古活字本中心-中巻第3話「狼とひつじとの事」
- 28) 島田清太郎『イソップ伝の研究』中央公論事業出版 p.7を参照。
- 29) 14世紀初頭, ビザンチン帝国の文人の Maximus Planudes (マキシムス・プラヌーデス) によって編纂されたギリシア語の散文。イタリアにもたらされ, 15世紀後半にラテン語に翻訳されている。
- 30) 中世に普及していた代表的動物寓話集。資料-1の③Phaedrus (ファエドルス) 集からの集成。寓話数81話。
- 31) ロムルス集に入らなかった寓話群の意。ヘブライ語による, 狐を主人公とした一連の寓話集成。寓話数17話。
- 32) 近世の集成。ロムルス集と大部分が重複しているため, 17話編が選出されている。寓話数17話
- 33) 資料-1の④ Babrius (バブリウス) 集からの集成。寓話数27話。
- 34) 古代動物寓話集ではなく, 12世紀成立のユダヤ系の世俗的教訓寓話集。全く別系統の寓話集をイソップの名のもとに取り込んでいるのが, シュタインハーベル集の特徴の一つ。寓話数15話。
- 35) 上(34)の注と同様に, 全く別系統の中世民間小咄。15世紀後半のイタリア人ポッチョ・ブラッチョリーニ撰の諷刺譚。寓話数7話。
- 29) から35) まで大学古典叢書7『古活字版伊曾保物語』p.p.157-158を参照。
- 36) 1番目「海に漂う流木」, 2番目「夫を亡くした女」, 3番目「愚かな娘」, 4番目「鼠と蛙」, 5番目「驚と甲虫」, 6番目「年老いた農夫と驢馬」, 7番目「自分の娘に惚れた男」である。

37) 『驚と甲虫』の寓話 (伝記部)

[134] こう言ったにもかかわらず、デルフォイ人たちは耳を貸さず、彼を断崖の上へ連れて行こうとしたが、アイソポスは逃れ、ムーサ女神たちの神殿に難を避けた。しかし、彼らは容赦なく、嫌がる彼を引きずり出した。アイソポスは次のように言った。「デルフォイの人々よ、この神殿をないがしろにするなかれ。」

[135] こんなふうに [私と同様], ウサギは、驚に追いつめられてスカラベのところに難を避け、自分を救ってくれるように頼みこんだのだった。するとスカラベは驚に、自分の願いを仇やおろそかにせぬように嘆願した。それは、自分の体が小さいからといってゆめゆめ侮るなかれと、ゼウスにかけて誓ってのことであった。ところが驚は、翼でもってスカラベを打ち、ウサギを奪って八つ裂きにし食り食ってしまったのだった。

[136] 怒ったスカラベは驚の後を追って飛び、機をうかがい、驚が卵をあたためていた巣に近づき、卵を粉碎してしまったのだ。帰ってきた驚は憤慨し、こんなことを仕出かした者を八つ裂きにしてやりたいと思うほどにも腹を立てた。再び産卵の 때가めぐりくると、彼は、もっと高いところに卵を産んだ。これを知ったスカラベは、再び同じことを仕出かして退散した。驚はというと、これはいよいよ、驚の族を絶やそうと企むゼウスの怒りから発するものかと言いながら、わが子のことを思い嘆いたのであった。

[137] ところで、[産卵の] 때가めぐりくると、耐えがたい思いに捕われた驚は、もはや巣のなかで卵を育てることをせず、オリュムポスへと登ってゆき、卵をゼウスの膝のうえに置き、〈そして〉 こう言った。『二度までも私は、卵をなくしてしまいました。三度目のいま、私は、あなた様が守ってくださるよう、これらをあなた様に預かっていただきます』と。これを知ったスカラベは、自分自身の体を大量の糞でまぶし、ゼウスのところへと登って行き、彼の面前を飛び回った。ゼウスは、汚らしい生き物を見て仰天し、跳び上がった。そして、卵を懷中にしていることを忘れ去り、それらを粉々にしてしまった。

[138] こういうことが起こったので、ゼウスは、スカラベに不正がなされたことに勘づき、驚が彼のところにやってくると驚にたいして、『おまえが子供たちを無くしてしまったのは、おまえがスカラベに不正を加えた以上は、正当なことだ』と言う。これに対しスカラベが次のように言った。『彼はただ単に、私に対して不正をなしただけではなく、あなた様にたいしても、大きな冒瀆を犯しました。何故なら彼は、あなた様にかけて誓いが立てられたにもかかわらず、それを畏れもせず、私に嘆願してきた者を手にかけて殺したからであります。ですか

ら、私は、彼を最大限に懲らしめないうちは、決して仕返しをすることを止めないでしょう。』

[139] ゼウスはというと、驚の族が根絶やしになってしまうことを望まなかったもので、スカラベに驚と和解するよう説得した。しかし、スカラベが説得に応じなかったので、驚の産卵の時を、スカラベが地上に現われない時期に替えたのだった。「同様にして、君たちも、デルフォイの人々よ、私が難を避けたこの神殿を、たとえこの神殿が小さいからといって、侮ってはならないのだ。スカラベのことをよく心に刻み、客人をもてなすゼウス（ゼウス・クセニオス）ならびにオリュムポスのゼウスを畏れるように。」

38) 「鼠と蛙」の寓話（伝記部）

[133] 「かつて生き物たちが同じ言葉を話していたときのこと、鼠が蛙と親しくなり、彼を食事に招待した。そして、彼を実に豊かな食物貯蔵庫に連れていったが、そこには、パンや肉やチーズやオリーブや無花果があった。鼠が蛙に、『さあ、食べてちょうだい』と言う。立派なもてなしを受けて蛙が言うことに、『ぼくのほうも、君を、おもてなししなきゃ。君も、ぼくのところにきて、食事をしてよ』。で、蛙は、彼を沼地に連れていき、『泳ぎましょう』と言う。鼠が、『ぼくは泳ぎを知らない』と言うと、蛙は『ぼくが教えてあげる』と言い、紐で鼠の足を自分の足に結わえつけて縛りあげ、沼のほうへ鼠を引きずっていき、[水の中へ] 引っ張りこんだ。溺れて息のつまった鼠は、『死んでも死なずに君に復讐してやるぞ』と言ったが、そう彼が言っているあいだにも、蛙は、彼を溺れさせ、殺してしまった。ところが、水のうえに横たわり浮いている鼠を、ワタリガラスが、いっしょに縛りつけられている蛙ともども引っさり、鼠を丸呑みにするとともに、蛙をも、むさぼり食ってしまったのだった。こんなふうには、鼠は蛙に復讐したのだ。私も、また、同様に、ひとびとよ、たとえ死んだとしても、君たちに祟ってやるだろう。というのも、リュディア人、バビロニア人、それから全ギリシアのほとんどのひとびとが、私の死花を咲かせてくれることになるだろうから」と。

39) 『鷲と甲虫』と『鼠と蛙』の収録対照表

Aesopica	⑦G本	⑬Sth		LaF		⑱古活字	⑲天草本
寓話	伝記	寓話	伝記	寓話	伝記	伝記	伝記
3 鷲と甲虫	134~139	III-2		II-8	29 (後部)		
384 鼠と蛙	133	I-3	26	IV-11	29 (中部)	中-9話	19
Cha	Jam	渡部本	③Phaedrus		④Babrius		
寓話	寓話	寓話	散文		散文		
4話 鷲と甲虫	185話						
244話 鼠と蛙	21話	15話	*		191話		

(注) Aesopica 3, 384(ペリー本)の掲載番号, ローマ数字(I~IV)+数字-巻数+第___話, 数字のみ-段落数, 数字+話-第___話
 Sth-シュタインヘーベル集, LaF-ラ・フォンテーヌ, 天草本-イソポのファブラス,
 古活字-伊曾保物語, Cha-シャンブリ, Jam-ジェイムズ,
 渡部本-ジェイムズ本の中から渡部が選り訳した本, Babrius-バブリウス版,
 Phaedrus-ファエドルス版, *-AD 4, Rom 3, Zander 1,
 ○数字は「イソップ寓話伝承系統図」

40) ラ・フォンテーヌ『寓話』(上)「フリギア人のイソップの生涯」

41) Gert-Jan Van Dijk, *AINOI, AIOFOI, MYΘOI Fables in Archaic, Classical & Hellenistic Greek Literature, With a Study of the Theory & Terminology of the Genre*, p.p.149-150参照。

42) 「鷲と甲虫」の寓話部

鷲とセンチコガネ

鷲が兎を追っていた。兎には助けてくれる者としてなかったが、ただひとつ、センチコガネを見つけたのを幸い、これに救いを求めた。センチコガネは兎を励まし、鷲が近づいてくるのを見ると、救いを求めて来た者を連れ去ってくれるな、と頼んだ。それなのに鷲は、センチコガネが小さいのを侮って、目の前で兎を平らげてしまった。

それ以来、センチコガネは恨みを忘れず、鷲の巣を見張り続けて、鷲が卵を生もうものなら、飛んで行って、卵を落として割ってやった。どこへ行っても追い出されるので、とうとう鷲は、ゼウスの所へ逃げこんで、安全な巣造りの場所をお願いした。鷲はゼウスの使わし婢であったのだ。

ゼウスは自分の懷で卵を生むことを鷲に許したが、それを見ていたセンチコ

ガネ、糞団子を作るなり飛びたって、ゼウスの懷の真上に来ると、ポトリと落とした。ゼウスは糞を振り払おうと立ち上がったとたん、うっかり卵を放り出してしまった。これ以来、センチコガネの出る季節には、鷺は巢を造らないということだ。

踏みつけにされていつか仇うちができないほど無力な者はない、ということをよく考えれば、一寸の虫を侮るべきでないことを、この話は教えてくれる。

(『イソップ寓話集』岩波文庫中務哲郎訳)

- 43) 「蜂」1446行～1449行 アリストファネス (上)『ギリシア喜劇 I』高津春繁訳ちくま文庫
- 44) 「平和」127行～134行 アリストファネス (上)『ギリシア喜劇 I』高津春繁訳ちくま文庫
- 45) 「女の平和」695行 アリストファネス (下)『ギリシア喜劇 II』高津春繁訳ちくま文庫
- 46) 「蜂」—「驢馬の蔭」190行—第460話, 「イソップと牝犬」1400行—第423話,
「シュバリスの男」1427行—第428話, 「シュバリスの女」1435行—第438話, 「鷺と甲虫」1446～1449行—第3話。
「平和」—「鷺と甲虫」127～134行—第3話。
「鳥」—「父親を埋葬する雲雀」470行—第447話, 「鷺と狐」650行—第1話,
「射られた鷺」807行～808行—第276話。
「女の平和」—「鷺と甲虫」695行—第3話。
「アカルナイの人々」—「王に選ばれた猿と狐」120行—第81話。

参考文献

- WILMER CAVE WRIGHT, Ph. D., *THE WORKS OF THE EMPEROR JULIAN*, Loeb Classical Library, First printed 1913.
- Ben Edwin Perry, *AESOPICA*, The University of Illinois Press, Urbana 1952
Reprint Edition 1980 by Arno Press Inc.
- Ben Edwin Perry, *BABRIUS and PHAEDRUS*, Loeb Classical Library, First published 1965.
- Thomas James, *AESOP'S FABLES*, R. CRAY, SON, AND TAYLOR, PRINTERS, London 1983.
- Gert-Jan Van Dijk, *AINOI, LOGOI, MYTHOI Fables in Archaic, Classical, & Hellenistic Greek Literature With a Study of the Theory & Terminology of the*

Genre BRILL 1997.

渡部温訳『通俗伊蘇普物語』明治5年官許。

『万治旧版伊曾保物語』百華書房，朝野書店刊・十銭文庫5 明治44年。

新村出『文祿舊譯天草本伊曾保物語』改造社，1928年。

新村出『翻字天草本伊曾保物語』岩波文庫，1939年第1刷，1997年第2刷。

山本光雄訳『イソップ寓話集』岩波文庫，1942年2月第1刷，1990年5月第57刷。

『日本教科書大系』講談社，1961年。

島田清太郎『イソップ伝の研究』中央公論事業出版，1973年。

島正三／編『天草本伊曾保物語などのことIII』文化書房 博文社，1983年。

飯野純英／校訂小堀桂一郎／解説『古活字版伊曾保物語』大学古典叢書7 勉誠社，昭和61年3月。

『ギリシア喜劇I』，『ギリシア喜劇II』（アリストパネス 上，下）ちくま文庫，1986年7月，8月。

遠藤潤一『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究正編』風間書房，昭和58年1月。

遠藤潤一『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究続編』風間書房，昭和59年1月。

遠藤潤一『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究総説』風間書房，昭和62年2月。

『柳田國男全集8』ちくま文庫，1990年1月。

ヘシオドス 松平千秋訳『仕事と日』岩波文庫1993年3月第5刷。

新村出，柊源一『校註吉利支丹文学集2』東洋文庫，平凡社，1993年

ラ・フォンテーヌ 今野一雄訳『寓話』（上）岩波文庫，1994年1月第20刷。

岩男久仁子『イソップ伝，原典諸資料に基づく比較研究』桃山学院大学大学院修士論文1995年。

パエドルス／バブリオス 岩谷智・西村賀子訳『イソップ風寓話集』叢書アレクサンドリア図書館X国文社，1998年1月。

中務哲郎訳『イソップ寓話集』岩波文庫，1999年3月。

Aesop and the Comedy of Aristophanes on the “Eagle and Beetle”

Kuniko IWAO

This thesis is an analysis of the Aesop fable “Eagle and Beetle” that is found in the comedy of Aristophanes and a comparative Aesop fable in the work known as “Text G”. “Text G” is the oldest among Aesop’s biographies [Data-1 Aesop’s Fables collections historical route diagram:⑦] and gives the most information on his life.

“Eagle and Beetle” is taken from the main fable told by Aesop in his last moments. “Mouse and Frog”, however, has lingered, and “Eagle and Beetle” has faded out. As for “Text G”, “Eagle and Beetle” is more important than “Mouse and Frog”. Because in “Mouse and Frog” Aesop met a tragic end unexpectedly. But in “Eagle and Beetle” a culmination of factors which were Apollon’s envy, Isis’s favor, his meritorious deed, and so on doomed Aesop to die at Delphi.

“Eagle and Beetle” seemed to be better known to ancient greeks than “Mouse and Frog”. Aristophanes often used Aesop fables in his works. Especially “Eagle and Beetle” in particular can be found in “Wasp”, “Peace” and “Lysistrata”. Aesop fables used in the Aristophanes works are in very short lines. Ancient greeks, however, recognized that the short line allusions were quoted from Aesop’s fables. In other words, the fable was very popular among ancient greeks. The way fables are used in Aristophanes works is very different from the way they are used “Text G”. Aristophanes didn’t take notice of the meaning of the fable, only showed the characters exaggeratingly on presupposing that the entire already audience knew the fable.

“Fable” is the metaphor implying a moral and satire. In Aristophanes

works they are parodied, and changed to something that can be laughed at.

Aristophanes was active in 445-385 B.C. The age was almost the same the Peloponnisos war period. He longed for the peace of the good old days, always stood against the current of the times, as a conservative who opposed the tendency of new thought or Socrates's campaign for enlightenment. He objectively watched the sign of the times ,when the pro-war party ran rampant, criticized demagogues, consistently fought in the cause of peace.

For Aristophanes, Aesop Fables and "Eagle and Beetle" that have been in this thesis are the most suitable way to express the desire of peace.